

# 毎日の保育問題 (九)

泣き方いろいろ 取扱方いろいろ

上 澤 謙 二

## ◇自覺をよび起す

泣きわめく子をじつと抱いて、みんなを離れたしづかなところへ連れてきて、さて、さうしませう。

『○○ちゃん、強いね、もう泣かないね、泣くのやめて。強いよ、もうやめよう』

抱きしめて、こんなやうにいひます。これは普通やる方法で、子供の自覺を促がし、それを更に社會的關係に持ち來たして動機を強めるのであります。

その言葉によつて、幾何でも『自分は強い』と、子供が思つたら、即ち自覺がよび起されたわけで、更に『先生がさう思つてゐる。だから強くならう、泣きやめよう』といふ氣持になつたさすれば、その自覺が對先生といふ社會的關係

に持ち來たされて『泣きやめよう』といふ動機が起つたわけでありませう。

それで泣きやめば、自發的にさうなつた色彩が濃く、理想的に近いのですが、それだけにむづかしいやうです。この程度では、まだ泣きつづける子供が多いのです。

## ◇社會的意識に訴へる

『○○ちゃん、あなたのほかに誰も泣いてゐないでせう。泣いてゐるのはあなただけよ。□□ちゃんだつてもう泣きやんだでせう。△△ちゃんだつて、先生のいふことをきいて、すぐ泣きやめましたよ。ほら、聞いてごらん。泣いてゐる聲なんて一つもしないから、○○ちゃんだつて、もうやめよう』

こんなやうにもいふでせう。

これは殆ど全く社會的意識に訴へる方法で、自分と周圍とを比較させ、團體に於ける自分の位地を發見させ、みんなと同じやうにならうとして自分を匡正させるもので、前よりは急所を狙つてゐます。

そこに働く子供の氣持は、主に「恥かしい」「か」仲間はつれになる氣つかひ」「かいかいふやうなもので、自分ひとりの問題でなく、相手があるだけに、さうしてそれが具體的な標準を提供するだけに、前よりも效果的な考へられます。

#### ◇間接に制限を與へる

けれども、それでもまだく泣きやまない子供があるのでせう。さういふ子供は、泣きながらしやくり上げながら、ものをいひます。

『先生……かへ……かへる。おうちへ……かへる。おかあ……あかさ……ん、呼んで……』

さういつても先生がわざとそれに答へなかつたりするに、急に大きな聲を出して『お母さん！お母さん！』と、さなつたりします。

『泣きながらいつたのでは、何だか、先生には分かりませんよ。先生……かへ……かへ……なんていつても分かりません。泣くのをやめて、はつきりいひなさいね。泣きな

がら話しては、何べん聞いたつて分からないでせう。だから、早く泣くのをやめて、それまでは先生は何も聞きませぬ』

口でさういふばかりでなく、頭をふつてみせて『聞かない』『さういふことを強く示したりします。』

これは少しきつい方法であります。

或る具體的な制限條件——『何も聞かない』『さういふ——を目の前に提出して、それに合致するために、さうしても泣くのをやめようとする努力活動を起させる方法であります。或は自覺に根ざして、或は社會的意識に訴へて、おのづからなる過程によつて、動機を生み出させようとする試みが成功しない場合は、間接ながらやゝ強制的意味を含むかういふ方法を探らなければならぬでせう。』

この方法によるに、大概の子供は、泣くのをやめようとする意志的努力をはじめるやうです。出る聲を止めようとする懸念になるやうです。

それはさうしなければいつまで泣いてゐても、事件は一向に進まない。従て自分の希望が達せられる段取には、到底ならないさういふことが分かるからですが、これを更に突き詰めれば『泣くさういふことは何の効果もないものだ。だからそれにかかずらつてゐてはならない』さういふことを、身をもつて経験するわけで、この経験は子供に取つては淺か

らぬ意味を持つものと思はれるのであります。かくて意志の方面が實際に即して練られ、心の強い子供になつてゆくのではありますまいか。

### ◇嘘ならぬ嘘を用ひて

然しこの程度で收まるのは、聞き分けがよくて、さうして意志的な子供であります。聞き分けがよくても氣の弱い子供は『泣くのをやめようとする努力』が足りません。意志的でも聞き分けのない子供は、たゞ自分の要求を通さうとします。

『いや〜ツ、かへる〜ツ』

いよく絶叫して、いよく身悶えして、興奮するさういふやうなこゝこになります。これに對抗して、先生が更にいひ聞かせようとするれば、興奮は更に興奮を生んで、事態は益々悪化するこゝこになります。それで方法を變へて妥協しなければならなくなります。

『よし〜、歸ります、歸ります。先生が連れて歸りますよ。でも、そんなに泣きながら、表へ出るをかしいでせう。そんなに泣きながら表をあるいてゆく人ないでせう。だから、泣くのやめて。やめたら、先生はいつしよに歸りませうね』

先生のこの言葉は、子供を、その要求のすぐ隣りまで連

れてきます。ただ一つ、泣きやめるさういふこゝこをすれば、思ふ通りにお家へ歸れるさういふこゝこになるのです。目的の實現はまごこに近くはつきりしてきました。まごこに於てか、聞き分けの乏しい子供でも、氣の弱い子供でも『泣きやめるさういふ唯この一事を努めるこゝこになるのです』

けれども、先生はけつしていつしよに歸るつもりではありません。だから嚴密にいへば、それは嘘をつくこゝこになります。

『良くも教育者が實際教育に従事してゐる際、嘘をもつてするなごこは——。子供に對する影響はさうか』

そんなに几帳面に思ふ先生もあるかも知れません。

けれどもこれは非常時です。さうにでもして泣きやめさせなければならぬ時です。而も出来るだけ無理や強制をなくして、さうしなければならぬ時です。さうすれば、この場合のこの言葉は、いかにもこの條件に合つてゐるのです。だから許されてよいと思はれます。

『それは所謂嘘も方便さういふこゝこではないか。方便でも嘘をつくのには理想的ではない。殊に教育上さうするのはいよく理想的ではない。そんなに非理想的なこゝこを敢てするのには左袒し難い』

かういはれる向があるかも知れません。

まごこが、この子供は、さういはれて泣きやんだまごこ

す。さうしてやがて知らず識らずのうちにみんなの生活の中へ再びはいつて、泣いたこゝはケロリと忘れて、又遊びはじめたさします。これは幼児に通有なこゝですが、さうなつたさするさ、この場合の先生の言葉は、泣きやんでみんなの中へはいるまでに至る途中の一つの出来事であつて、けつして嘘にはなりません。その子供はそこに『自然の経過』を感じるだけで、一向『嘘』を感じないからです。

將た又嘘の嘘たるや、他人に迷惑害悪を與へるこゝを目的として巧まれるこゝろにあります。然るにこれはその正反對——相手に生長さ幸福さを與へるこゝを目的としてなされるのです。先生自身の側からしても、けつして嘘さはいはれないでせう。

それでこれは嘘ではなくなります。相手からすれば『自然の経過』自身からすれば『教育的方法』になるのであります。

### ◇注意を轉換させる

甚だしく内向的な子供、もしくは年少組の新しい子供なごに取つては、この制限法は少し強過ぎるやうです。

彼等に取つては、この制限は、さても越えられない城壁のやうです。威壓されて、その前にすくむばかりありません。もしこれをやつたら、いよゝゝ烈しく泣き出すさいふやう

なこゝになります。

それで、おのづから別な方法が探られねばなりません。『まあ、きれいな花。まつ赤、まつ赤ねさういひながら、花瓶にさしてある花のこゝろへゆきます。』

『まあ、いゝにほひね』

鼻をそばへ寄せて、わざさフン／＼と聲を立て、嗅いでみます。子供の注意をそこへひきのけるためです。

『○○ちゃんも嗅いでみる。』

さういはれて嗅いだら幸ひ。頭をふつたら直に方向轉換です。

『おや、あんなこゝろに鳥がさまつてゐますよ。澤山さまつてゐるわね』

窓から見える電線にさまつてゐる雀を指さします。

『ほら、何かお話してゐますよ。あつ、三羽飛んでいつちやつた。おや、二羽飛んできてさまつた。何羽ゐるでせう。』

一、二、三——おや、又二羽飛び出した。面白いわねえ』

即ち注意の轉換であります。『泣くさいふこゝにはかう集注してゐる意識を、花に、雀に、置き變へて、おのづから泣くこゝに遠ざからせる方法です。』

### ◇興味の焦點を見出す

しかしさう容易く注意が轉換できない程、心がむづかし

く結ばれてゐるこゝがあるでせう。その時には別な方法が探られねばなりません。

『ほら、かはい、お人形さんがゐる。きれいなおベ、著てね。□□ちゃんに抱つこしたくないんですつて。抱つこして上げる?』

さういつてみて、□□ちゃんが手を出して抱つこしたら、占めたものです。恐らく途端に泣きやむでせう。

けれども人形にはそれ程心惹かれないで、相變らず泣きつづけるこゝします。

『ほら、きれいな繪本ね。何が描いてあるでせう。おや、大きな猫がゐるわね。まあ、澤山お魚が泳いでゐる。ユラユラ、ユラ、ほら、ほら、ほら』

一枚々々開いて、一つく指さす。一つのページで興味が起らなかつたら、次のページ、又次のページを開いてゆく。泣聲が高まらないで、目が繪に注がれてゐたら、泣きつづけてゐても、兎に角興味がつながつてゐるものゝ察して誤らないでせう。だからさういふ状態である間は、繪本から離れないでよいでせう。それからそれへ開いてゆくうちに、だんく泣聲が鎮まるか、或は開いた新しいページを見つめて、ふつ泣聲がやまつてしまふやうなこゝがあるでせう。

けれどもそれ程繪本に心惹かれないで、初めから受けつ

けないか、二三ページで泣き聲が高まるこゝします。

『ほら、コロコロコロ』  
いきなりボールを出してころがします。ころがったボールは、部屋の間へこまります。

『おや、あんなこゝろまでいつちやつた』

泣きながらも、子供の目はその方に注ぐ。けれどもそれに對する興味は充分でなく、まだ泣く方に心取られてゐるこゝ見たら、もう一つはうりませう。

『ほら、又コロコロコロ』おや、こんなこゝろへいつちやつた』

ボールは机の脚にぶつかつて、はねかへつて、はうつた人の膝の近くへこまつたのです。

かうして三四度繰返して、子供の興味が相當昂まつたこゝ見たら、一步プログラムを進めます。

『□□ちゃんもころがしてみる?』

さういひながら、ボールをその手に移します。この間は答を要求しません。この際必要なのは言葉の表現よりは、手の行動なのです。手の行動が氣分を轉換させて、泣くこゝから脱却させる契機となるからです。而も言葉を使つてわざく相手に順應する程の餘裕がない氣持なので、さういふ面倒をさせるこゝはかへつて泣くのを増長させる結果となる危険があるからです。

先生の觀察と取扱方が喰ひちがひがなかつたら、多分子供の手はそつと動いて、ボールはそろ／＼ころがり出すでせう。

『おお、コロ／＼コロ／＼、そこへゆくでせう、そこへ——あつち、しまつた』

先生は子供の目がそのゆくへを追つて、やがて椅子のかげにしまつた時は、子供の泣聲はやんでゐるでせう。

『さあ、もう一つころがしてちやうだい』

ボールが何度かころがるに伴つて、泣顔は次第に笑顔に變つてくるでせう。

これは即ちその子供の興味の焦點を探し求めて發見するここです。さうしてその興味を強く活躍させるここによつて、おのづから泣くのを忘れさせるここです。

#### ◇五十里以上まで来た

かうして兎にも角にも泣きやんだら、百里の道は五十里以上往つたことになります。次になすべき残された道程は、再びお友達の間へ入れて、全くもその状態に回復することです。

それには又いろいろな方法と取扱方があると思はれますが、先づ泣くのがやんで先生がホツとしたところで、筆者もホツと息を入れることにしませう。

「あとがき」 昨年九月號にふと筆をすべらせてから、編輯部のお言葉にあまへ、こんなに長くつゞけてしまひました。私としてはお蔭さまで思ひがけない勉強をさせていたゞきましたこと、感謝に堪へません。初めに「はしがき」を書きました關係上「あとがき」を一筆いたしました。

## 會 告 八月號休刊

本誌八月號は休刊し、九月に於て、八・九兩月號を合冊發刊いたします。

昭和十六年七月

日本幼稚園協會